

国語

(問題)

2024年度

〈R06152064〉

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～17ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルでていねいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の指定された場所(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に、いねいに記入してください。
 - (2) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
 - (3) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
 - (4) 解答の際は、「」や「」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに記入してください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 問題冊子の余白などは利用してかまいませんが、どのページも切り離さないでください。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
9. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たち人類が今のよう^にに農耕を行い定住し始めたのは1万年ほど前だと言われています。それまでの100万年ほどは、少人数のグループで移動しながら狩りや採集で食べ物を集める狩猟採集生活を送っていたと考えられています。1万年という時間は、長いようですが生物の体のつくりを変えるには短すぎます。したがって、私たちの身体や脳は未だ約100万年続いた狩猟採集生活に適応していると言われています。これが「私たちのからだには狩猟採集社会の①こころが詰まっている」と言われる理由です。

狩猟採集生活がどんなものだったかは、近年まで狩猟採集生活をおくっていたナミビアのクン族などの研究からおおまかな様子がわかっていきます。狩りや採集や調理、育児を集団で協力して行っていたと想像されています。

多くの狩猟採集社会で共通しているのは「平等性」です。群れのメンバーは公平に扱われます。獲物を多くしとめたからといって、分け前が多くなるわけではありません。この平等性は群れのメンバーが安定して生き残るために

A

なくくみです。もし、獲物を

をしとめた人だけが食べ物にありつけるようにしたらどうなるでしょうか。元気なときにはそれでいいでしょうが、ひとたび怪我や病気をしてしまえば、その時点で食べ物が入らなくなつて餓えてしまいます。怪我や病気はどんなに気を付けていても避けがたいこ

とです。そんな社会ではとてもに子孫を残していくことはできないでしょう。狩猟採集社会の平等性は、集団のメンバーが子孫を残す（つまり増えていく）ための重要なしくみです。

B

に子孫を残していくこと

この平等性を維持するために、クン族は並々ならぬ努力をしています。なによりも大事なことは協力的で偉ぶらないことです。クン族の逸話でこんな話があります。もし狩りに行って大きな獲物をしとめることができた場合、その人は決して大喜びで帰ってきたり、自ら手柄をせんでんするようなことはしません。普段と同じように帰ってきて、仲間のところに加わります。自分からは言い出さず、仲間が狩りの成果を聞いてくれるまで待ちます。聞いてくれたとしても、「なんにも見つけられなかったよ……まあほんのちっぽけなものならあったかな」と、できるだけ、大したことではないふうをえんじながら、自慢にならないように気を付けて成果を報告するそうです。

私たちの目から見ると、そこまで気を使わなくても……と思わなくはないですが、そうしてしまいう気持ちはわかるのではないでしょう。もし、偉ぶってしまったって嫌われてしまったら、次に自分が獲物を捕れなかったときには助けてもらえないかもしれません。そうなれば、自分も自分の家族もみんな餓えてしまいます。狩猟採集生活者にとって、仲間から嫌われないこと、仲間外れにされないこと

は生きていくうえで何よりも大切なことだったのでしよう。

人間はこのような社会で100万年を過ごしてきました。したがって、人間の考え方も倫理観も未だこの狩猟採集生活に適応していると考えられています。みんなに協力的で、偉ぶらず、自慢しないのがとうとばれます。これは現代社会でも同じではないでしょうか。たとえば本当に偉かったり自慢するだけの成果を残していたとしても、それを偉そうに自慢をする人は嫌われ、偉ぶらず謙遜している人の方が人格者として評価されます。それも私たちが狩猟採集生活の心を未だに有していることを示しているのかもしれませんが。

私たちが協調性を重んじて、隣人と仲が良くないと悩むのはこの考え方の名残だとみなすことができます。いわば時代遅れの本能が残っているのです。たしかに、狩猟採集社会では仲間外れにされることは死活問題です。

C、今やそうではありません。協力は社会制度の中に組み込まれています。現代社会では、たとえば世界中の人から嫌われていたとしても生きていく権利がほしうされています。人間関係にまつわる悩みのほとんどは、生死には関係なく、いわば気持ちの問題です。

②このような時代遅れの悩みを解決するには、学ぶことより他はないかと思えます。生物としての進化のスピードは社会の進化に比べて圧倒的に遅いので、進化に任せていては社会変化についていきません。一方で、人間の考え方は学ぶことで変えることができます。

本能が求めることの理由を学べば、理性によって本能に逆らうことができます。

たとえばバンジージャンプがあります。あれは誰がどう見ても命を危険にさらす行為です。人間の本能は恐怖を感じて忌避するでしょう。ところが人間は（全員ではないでしょうが）、ひもがついていれば安全だと確信して、飛び降りることができます。もっと極端な例では、殉教者など、自分の命ですら信念のために投げ出すことができる場合もあります。人間以外の生物では、決して真似できないことでしょう。

人間は学習によって本能を超えた行動ができる今のところ唯一の生物です。論理的に考えて役に立たない、意味のない悩みは捨ててしまうことが可能です。悩みというのは③状況で生じるものです。悩みの解決にはまずその悩みをもたらした生物的な由来を理解することです。そして本当に悩む価値のあることなのかどうかを吟味することです。その結果、現代社会を生きる上で悩む必要のない問題だと理性が判断するのであれば、そんな悩みは無視して、もっと自分が大事だと思うことに時間を使う方がいいですし、人間にはそれが可能です。

生物としての人間全体の話に戻ります。生物としての人間は他の個体と協力することによって大きな社会を作り出しました。さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか。

人間の協力性を可能にしたのは、人間のもつ「共感能力」だと言われています。

D、他の人の気持ちになつて考えられるということです。これによつて他者の望むことを察知し、協力関係を築くことができます。この共感能力は人間が増えることに大きく貢献しましたが、最近の傾向として、この共感能力は人間のなかでますます強化されてきているように思います。つまり人間は④^④どんどんやさしくなつてきています。

近年、ウシやブタなど動物の肉を食べることについてしばしば問題視されるようになってきています。食肉の問題のひとつは温暖化などの環境負荷^{かんきょうふか}が大きいことだと言われています。たとえば100gのタンパク質を生産するのに、大豆であれば2・2㎡で済むところを、ウシを放牧した場合は164㎡と70倍以上の広い土地が必要になります。また冗談^{じやうたん}のような話ですが、ウシのゲップはメタンを含^{ふく}んでおり、このメタンが大きな温室効果をもたらしていると考えられています。

E、食肉には倫理的な問題があると指摘^{してき}されています。私たちと同じほ乳類であり、ある程度の知能をもったウシやブタを殺して食べることが許されるのかという問題です。私自身は肉が大好きですので、普段から何の疑問も抱^{いだ}かずにウシもブタも食べています。ただ、それはよくよく考えてみると、そういった疑問などを抱かなくて済むようなシステムができ上がっているからのように思います。

たとえば、スーパーの肉売り場ではウシやブタの肉の切り身がきれいにパックされて並んでいます。そこに生物としての姿はもうありません。骨や血液、皮膚^{ひふ}、毛、臓器など元の生物の特徴^{とくちょう}はきれいに取り除かれています。どこかで生身の動物から肉を切り離^{はな}す作業が行われています。マグロの解体ショーはよく見世物になっていますが、あれは魚だからまだ許されているように思います。私たちは、自分と同じほ乳類を殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感^{ていこうかん}を持っていることを示しています。

これは人間という生物の特性からすれば当然のことです。私たちは少産少死の戦略^{さくさく}を極めた生物ですので命を大切にします。それも自分だけではなく、他の人の命も大切です。それは人間が大きな協力関係の中で生きているからです。私が生きて増えるためには、他の人の協力が必要です。したがって、人を殺すということには大きな抵抗感を持つようになるのは当然です。そしてこの抵抗感は、人間以外の人間とよく似た生物、たとえばほ乳類などであれば（人間ほどではないにせよ）適用されてしまうようです。

これは仕方のないことのように思います。ほ乳類の体のつくりは人間とよく似ています。ネズミでも、体温、皮膚、骨、血管があり、切ると血が出ます。内臓もほとんど人間と同じセットがそろっています。ふるまいも人間と似ています。イヌやネコを飼っている人であれば、そのしぐさやふるまいに人間らしさを感じることも多いでしょう。人間の家族と同じように扱っている人も多いのではないで

しょうか。彼らは人間ではありませんが、やはり喜怒哀楽があり、好き嫌いもあり、可愛くて時にやさしさも見せます。そのような動物を殺して食べることをできるだけ避けようとするのは当然のことでしょう。

ウシやブタも変わりありません。家でペットとして飼うことはあまりないのでよく知られていないだけで、牧場に行けば人懐っこいウシがいますし、ブタをペットとして飼っている人もいます。彼らにもきつと人間と同じような喜怒哀楽があることでしょう。むしろそうしたウシやブタの人間らしさを知らないおかげで、平気で食べることができているのかもしれませんが。もし小型のウシやブタがペットとして広く飼われるようになったら、もう人間はウシもブタも食べられなくなるのではないのでしょうか。そこまでいなくても、自分が家族のように大事にしているイヌやネコと、今晚のおかずのウシやブタは同じ生物だと一度でも意識してしまうと、どんどん食べにくくなっていくように思います。実際に近年、動物食を控える

選択をする人が増えているという統計結果もあります。私たちは少しずつ、他の動物へも共感のはん囲を広げているように思います。この人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません。

(中略)

私たち人間は、人間からは遠く離れた生物の命についても、ある程度は大事だと思っています。それは少産少死の戦略を極めて命が大事になり、かつやさしくなって自分以外の生物の命も大事になってしまった人間の宿命でしょう。私としては、この傾向が良いかどうかをとにかく言うつもりはありません。これは増えるために少産少死の戦略を極めた生物にとって必然だと思うからです。

(市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』より・一部改)

※殉教者……自ら信じるもののために死ぬ者。

問一 — a 「せんでん」 ・ — b 「えん」 ・ — c 「とうと」 ・ — d 「ほしょう」 のひらがなを、漢字に直しなさい。

問二

A

 ・

B

 に入る語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 安定的 イ 科学的 ウ 打算的 エ 合理的 オ 人間的

問三

C

 ・

D

 ・

E

 に入る語の組み合わせを選び、記号で答えなさい。

ア	C	つまり	D	しかし	E	さらに
イ	C	つまり	D	さらに	E	しかし
ウ	C	しかし	D	さらに	E	つまり
エ	C	しかし	D	つまり	E	さらに
オ	C	さらに	D	つまり	E	しかし
カ	C	さらに	D	しかし	E	つまり

問四 — ① 「狩猟採集社会のころ」とありますが、その説明として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の成果を自慢しない控えめな人が、集団の中では重んじられる。
イ 大きな獲物をしとめた人が、集団の中でリーダーとして評価される。
ウ 集団において嫌われる行いをする人は、生き残る可能性が低くなる。
エ 病気の人にも食物を^{あた}与えることにより、集団の平等性がたもたれる。

問五 — ②「時代遅れの悩み」の具体例として、適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地震で倒れるのが恐ろしいので大きくかたむいたふり住宅に住めない。

イ ライオンがこわくて仕方ないので鋼鉄でつくられたオリの前に行けない。

ウ 重たい物体が飛ぶわけがないと感じるので飛行機にどうしても乗れない。

エ 火傷してしまうかもしれないと思うのでガスコンロで火をつけられない。

問六 — ③に入る語句を選び、記号で答えなさい。

ア 気持ちがおさえきれない

イ 社会が人を大切にしない

ウ 現実が本能にそぐわない

エ 答えが一つに定まらない

問七 — ④「人間はどんどんやさしくなっています」とありますが、それによって引き起こされた人間の考え方の変化について述べら

れている部分を本文中から十八字で抜き出して、そのはじめと終わりの三字を答えなさい。

問八 — ⑤「喜怒哀楽」とありますが、同じ組み立ての四字熟語を二つ選び、記号で答えなさい。

ア 我田引水 イ 大器晩成 ウ 起承転結 エ 花鳥風月 オ 日進月歩 カ 電光石火

問九 — ⑥「やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません」とありますが、なぜ不思議のですか。三十六字以上四十五字以内で説明しなさい。

問十 本文の内容と合うものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代においても競いあう状態を維持することで、人間の社会は発展し続けている。
- イ 人間は他者に共感する性質をすでに失ったので、動物が食べられなくなり始めた。
- ウ 現代でも人間が平等性を重んじるのは、大昔からの性質が残っているためである。
- エ 平等意識を持った人間が社会を形成して、共感能力を失いに身につけていった。
- オ 狩猟採集生活で育んできた協調性は、人々の関係性を悪化させる面も持っている。
- カ 人間の社会が拡大した要因として、他者の心を考えて行動する人間の特性がある。

次の文章は、「私」が通っていた学校の退屈な授業中に起こった出来事をえがいている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

先生が顔をあげて、学級を見わたしたので、私はびっくりして、悪いところをつかまりでもしたように、先生の頭のとっぺんに注いでいたまなざしを沈めた。

「ヴェラー」と先生が呼ぶのが聞こえた。うしろのほうで最後のベンチの一つから、オットー・ヴェラーがおとなしく立ちあがった。彼の大きな赤い顔が他の生徒たちの頭の上に仮面のように浮かんだ。

教授は彼を教壇のそばへさしまねき、青い小さい帳面を彼の顔の前につきつけ、小声でふたことみこと尋ねた。ヴェラーも同様にささやきながら、目に見えてそわそわと返事をした。どうやら彼は少し白目をむいて、心配しおびえた様子をしているらしかった。そんなことは彼には珍しいことだった。彼はおちついた性質で、ほかの人ならきつと苦痛に感じるいろいろなことでも、彼は平気ですごせるたちだった。

(中略)

なまりが多くて、気立てのよい彼に、私は好感を持っていたが、彼とたびたびいっしょになりはしなかった。私たちは別なはん囲で暮らしていた。学校で私はこてん語学生に属しており、教壇の近くに席を持っていた。それに反し、ヴェラーは、ずっとうしろに腰かけている愉快ななまけ者の仲間属していた。彼らは、先生の問い

に答えられることはまれで、くるみや乾燥なしなどをよくズボンのポケットから出して食べていた。張り合いのない点でも、臆面もなくおしゃべりし、くすくす笑う点でも、しばしば先生のお荷物になった。学校の外でもオットー・ヴェラーは、私とは別な世界に属していた。彼は、私の地区からは遠く離れ、町はずれの駅の近くに住んでいた。彼の父は鉄道に勤めていた。私は一度も会ったことがなかった。

オットー・ヴェラーはささやき声で少し問答した後、自分の席へ帰されたが、不満で苦しんでいるらしかった。教授はしかし立ちあがって、例の小さい紺いろの帳面を手を持ち、教室全体をじろじろ見まわした。彼のまなざしは私にくぎづけになった。彼は私の方に歩いて来て、私の筆記帳を取り、調べてから尋ねた。「作文はできたね？」私が、はいと答えると、先生は自分についてくるように、私に **X** くばせし、戸ぐちへ行った。驚いたことに、先生はその戸を開いて、私を外に連れ出し、また戸をしめた。

「一つ用事をたのまれてもらいたい」と先生は言い、青い帳面を私に渡した。「これはヴェラーの成績帳だ。これを持って、彼の両親のところへ行くのだ。そこで、ヴェラーの成績の下署名はほんとに父親の **Y** であるかどうか、先生がきいてこいと言った、

と言うのだ」

私は先生のあとからまた教室にそつともどり、木の帽子ぼうしかけから帽子をとり、帳面をポケットに入れて、出かけた。

こうして奇跡きせきが起こった。退屈たいくつこの上ない授業の最中に、先生は、私をうるわしい明るい午前の世界に散歩に出すことを思いついたのだ。意外な思いと幸福のあまり、私はほおつとしていた。これより願わしいことは考えられなかったろう。松の板の段々が踏みふみへらされて深くくぼんでいる階段を二つ、私はぴよんぴよんとはねおりた。ほかの教室の一つから、書き取りをする先生の単調な声のひびくのが聞こえた。はねながら門を通りぬけ、平らな砂岩の段をおりて、ありがたい幸福な気持ちで私は美しい朝の中にぶらぶらと歩いて行った。今しがたまでは飽き飽きあきあきするほど長くうつろに思われた朝だったのに。——この外はそうではなかった。外では、教室の中で時間から命を吸いととり、時間を驚くほど長く引きのばす味気なさも目に見えぬ緊張きんちやうも、まったく感じられなかった。

(中 略)

この日初めて私は、短いあいだであったが、時間というものを忘れるあの恵み深い永遠の中にひたった。

教会の時計の打つ音が私をさませた。私ははつとして、長い時間をすごしてしまったかと心配し、自分の用事を思い出した。そのとき初めて、この用事と、それに関連のあることが、私の注意と関心をとらえた。それ以上ぐずぐずしていないで、駅の地区に急い

で行くうちに、教授とささやきをかわしていた時のヴェラーの情けない顔が、それから、白目をむいてゆつくりと、打ちのめされたように自分の席にもどって行った時の背中と歩きぶりの表情が、また私の心に浮かんた。

ある人がいつでも同一人ではありえないこと、いくつもの顔、いろいろな表情と態度を持ちうることに、それは新しいことではなかった。そんなことはとっくの昔から心得ており、他人についても自身についてもよく知っていることだった。しかし、ルイレキの顔※を持ち、ズボンのポケットにいっぱい食べ物を入れているお人よしのヴェラーにも、こういう区別、勇気と不安、喜びと嘆きなげとの間のこの奇妙きみょうな危険な変化があるというのは、新しいことだった。いちばんうしろの二つのベンチに腰かけていて、学校のことなんか全然心配しておらず、学校で恐ろしいものと言えれば退屈たいくつぐらいだと思われていた連中のひとり、勉強にはいたって無関心で、書物になんかさっぱり親しんでいないが、その代わり、くだものやパンや取り引きや金やその他おとなのこととなると、私たち他のものをはるかにしのぎ、もうほとんどおとなであった仲間のひとりの場合も、そう②だということは、それを思いめぐらしているうちに、私をひどく不安にした。

(中 略)

さて、世間のことをそんなによく心得ていて、学校のことなんかさっぱり気にしなかったこのヴェラーが、明らかにひどく心配して

いた。最近の成績表の下の父の署名が本物でないという疑いがあったのだ。ヴェラーはひどくこま^bったように見え、教室を通過して席に帰る時、打ちのめされたような表情をしたので、その疑いは正しいと考えることができた。そうだとすると、それは単に疑いではなく、つまりオットー・ヴェラーは自分で父の署名をまねしようと試みたという容疑、あるいは告発になるのだった。しばし喜びと自由に陶^c酔した後、ふたたびわれにかえり、これはたいへんないまわしいできごとだと、ほのかに感づき始めた。私はむしろ、授業時間中に選^dび出され散歩に送り出された^Zでなかったらよかった、と願い始めた。風が吹き、雲の影^eが走るほらかな午前と、私の散歩している美しい世界とが変化して、私の喜びは影をひそめてしまい、その代わりに、ヴェラーと彼の事件とで頭がいっぱいになった。不愉快な、悲しくなる考えばかりだった。私はまだ世間知らずで、ヴェラーの実際的な経験に比べれば、ほんの子どもだったが、それでもやはり、年ごろの青年のために書かれたまじめな道徳的な物語を読んで、署名の偽造^fは、まったく悪いこと、刑事上^gのこと、罪人を牢屋^hから絞首台ⁱへ導く途上の一段階であることを知っていた。しかし、私たちの級友オットーは、私の好きな人間だった。極悪者^j、絞首台にかけられるべき者と思うことはできないような、おとなしい、いい男だった。署名が本物で、容疑が誤りだということが明らかに^Aなったら、私はいろんな物をおしげもなく投げ出しただろう。だが、心配そうにおびえた彼の顔を私は見なかっただろう。彼は不安を

持っていること、したがってやましい良心をいだいていることを、まったくはつきり気づかせはしなかったか。

またすっかり歩みをゆるめながら、私はもう、鉄道の人たちだけの住んでいる建物に近づいた。その時、ひよっとしたらオットーのためを計ってやることはできないだろうか、という考えが起こった。あの家に全然はいらずに、教室に帰って、署名はまちがっていない、と教授に報告したらどうだろう、と私は考えた。そう思いつくと、たちまち私は重い胸苦^kしさを感じた。つまり、私自身この悪いできごと^dに巻きこまれてしまうのだった。この思いつきに^dしたがったとすると、私はもう偶然^lえらばれた使いでも、わき役でもなくなつて、協力者、共犯者になるだろう。私はいよいよゆっくり歩き、とうとうその家を通り過ぎ、ゆっくり歩きつづけた。時をかせいで、なおよく考えてみる必要があった。人助けの気高いうそを言う決心をもう半ばつけてしまつて、ほんとに口に出し、その結果に巻きこまれてみると、それは自分の力に余ることだ、と悟^mった。賢明ⁿさからではなく、結果に対する恐れから、私は救い手の役割を断念した。第^o二の、^③それほど罪のない逃げ道^oがさらに心に浮かんた。つまり、引き返して、ヴェラーのうちにはだれもいなかった、と報告することできたのだ。だが、そういううそをつく勇氣も、私には十分なかった。教授は私の言うことを信じるだろうが、それでは私はなぜこんなに長いあいだ帰つてこなかったのか、と尋ねるだろう。悲しくなつて、心にやましく感じながら、その家に入り、ヴェラーさん、

と呼んだ。

すると、女の人が、二階にあげなさい、ヴェラーさんは二階に住んでいるけど、勤めに出ているから、奥さんにしか会えないよ、と教えてくれた。私は階段をあがって行った。殺風景な、むしろ感じの悪い家で、台所と、強いアルカリ水あるいはシャボンのおいがした。二階で私は、言われたとおり、ヴェラー夫人に会えた。彼女は台所から出て来たが、急いでいて、何の用か、と手短かにきいた。受け持ちの先生の使いで来たので、オットーの成績のことだと告げると、彼女は両手を前かけでふいて、私をへやに通し、いすをすすめて、バターパンかりんごでも出しましょうかと、ききさえた。私はもう成績表をポケットから出して、彼女の前にさし出し、この署名はほんとうにお父さんのものかどうか、教授がお尋ねですと言った。彼女はすぐにはのみこめなかった。私は繰り返さなければならなかった。彼女は緊張して聞いていたが、開かれた帳面を目の前に持つて行った。私は暇をかけて彼女をしげしげと見る事ができた。彼女は非常に長いあいだじっと腰かけたまま、帳面をのぞきこんで、一言も言わなかったからだ。そうやって観察していると、息子が彼女にたいそう似ていることを知った。ルイレキがないだけだった。彼女は生き生きと赤い顔をしていたが、そうやって腰かけたまま何も言わず、帳面を両手で持っているうちに、その顔がごく緩慢にたるみ、疲れ、しおれ、年とって行くのがわかった。数分たった。ついに彼女は帳面をひざに落とし、また私の顔を見た。ある

いは見ようとした。とたんに、大きく開いた二つの目から、静かにとめどなく大きな涙が流れ落ちた。彼女が帳面を両手に持ちつづけ、それをよく調べるような様子をしているあいだに、さっき私の心にもわいたあの心像が、彼女の前にも現れ、悲しい恐ろしい列をなして彼女の心の前を通り過ぎたことが、推察されるように思われた。それは、悪へ、法廷へ、牢屋へ、絞首台へと通じる罪人の道の心像だった。

子どもの目にはおばあさんであつた彼女と向かい合つて、私は深く胸をしめつけられる思いで腰かけていた。彼女の赤いほおの上を涙が流れるのを見、何か言うのを、待っていた。長い沈黙は実に耐えがたかった。しかし彼女は何も言わなかった。彼女は腰かけたまま泣いていた。私がもう耐えられなくなつて、とうとうこちらから沈黙を破り、かさねて、ヴェラーさんは自分で名まえを成績表に書きこんだかどうか、と尋ねると、彼女はなおいつそう憂わしげな悲しい顔をして、いくども頭を振つた。私は立ちあがつた。彼女も起きあがつた。私が手をさしのべると、彼女はそれをとつて、力強いあたたかい両手の中にしばしはさんでいた。それから彼女は不吉な青い帳面をとつて、数滴の涙をぬぐい去り、戸だなの方に行つて、新聞紙を一枚引っぱり出し、二つに裂いて半分を戸だなにしまい、あとの半分で小ぎれいに帳面のカバーを作った。④私はもう帳面を上着のポケットに入れることをせず、ていねいに手で持つて行った。

私はもどつた。そして報告をしたが、実際は、長いあいだ外にい

たことを責められなかったのに、失望した。責められるのは、当然のことであり、それで自分もいささか共に罰せられたような一種のなぐさめを私にとって意味しただろうから。——そのあと私は、このできごとを忘れるように極力つとめた。

私の同級生が罰せられたかどうか、どんなふうに罰せられたか、私はついに聞かなかった。私たちふたりはこの件について一度も一言も話し合わなかった。私は往来で遠くから彼のおかあさんを認めるようなことがあると、どんなまわり道もいとわず、彼女に会うこ

とを避けるようにした。

(ヘルマンIIヘッセ「中断された授業時間」(高橋健二・訳)より・一部改)

※ルイレキ……首のあたりにできるはれもの。

※絞首台……首をしめて殺す刑に用いる台。

※心像……イメージのこと。

問一 — a 「こてん」 ・ — b 「こま」 ・ — c 「ふたた」 ・ — d 「したが」 のひらがなを、漢字に直しなさい。

問二

X

 ・

Y

 に入る語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア	目	イ	指	ウ	口	エ	足	オ	耳	カ	手
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問三 — A 「おしげもなく」 ・ — B 「いささか」 の意味として適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A	ア	むだにせず	イ	ふんだんに	ウ	あきらめて	エ	心にもなく
B	ア	何だか	イ	まるで	ウ	少しは	エ	意外と

問四 — ① 「目に見えてそわそわと返事をした」とありますが、ヴェラーがそのようなふるまいをしたのはなぜですか。その理由を次のように説明するとして、() にあてはまる二十一字の部分を本文中から抜き出して、そのはじめと終わりの五字を答えなさい。

先生が () を、疑っていると感じたため。

問五 — ② 「私をひどく不安にした」のは、なぜですか。その理由を次のように説明するとして、() にあてはまる五字の部分を本文中から抜き出して答えなさい。

「私」の報告は、オットー・ヴェラーの不正の () かもしれないと気づいたから。

問六

Z

に入る語を選び、記号で答えなさい。

ア 特待生

イ 受刑者
じゅけいしや

ウ 幸運児

エ 苦勞人

問七

③ 「それほど罪のない逃げ道」とありますが、なぜそう言えるのですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 友人の母親を悲しませることの重大性に比べれば、自分が人にうそをつくことなどはまったく問題ではないから。

イ にせの署名をしたことをかばうのではなく、先生の用事を果たさなかったという自分一人だけの罪にできるから。

ウ 自分はただ先生から用事を頼まれただけであって、署名が本物なのかにせものなのかについては関係がないから。

エ 仲間の不正をかばうための言葉ならば、うそであることが明らかになったとしてもやがてゆるされるはずだから。

問八

④ 「私はもう帳面を上着のポケットに入れることをせず、ていねいに手で持って行った」とありますが、なぜですか。四十六字以

上六十字以内で説明しなさい。

問九

⑤ 「一種のなぐさめ」における「私」の心情の説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分が苦しむことで、他者に苦しみをあたえる役割をした心の重みからわずかにでも逃^{のが}れたたいという心情。

イ 自分だけしかられるわけではないと感じることで、ヴェラー夫人に対する罪悪感を軽くしようという心情。

ウ 友人の母親を問いつめて苦しめたという事実を忘れるために、どのような罰をも受け入れたいという心情。

エ もどるまでの時間がかかりすぎたことを自分がとがめられるかわりに、友人をゆるしてほしいという心情。

問十 この文章について〈ひろし〉と〈みきお〉と〈みなこ〉が話し合っています。――ア、カから、この文章の内容や表現に対する意見として適切とはいえないものを二つ選び、記号で答えなさい。

〈ひろし〉 この作品、すこし難しい表現もあったけれど、すんなり読むことができたな。どうしてだろう。

〈みきお〉 登場人物がそれほど多くないし、中心的な役割の「私」とヴェラーの関係性が説明されているから、わかりやすかったな。

〈みなこ〉 表現上の工夫も感じられたね。「私」が見たり、聞いた^イりしていることが書かれていて、情景が浮かびやすかったな。

〈ひろし〉 なるほど。ヴェラーの母親に帳面を渡す場面を読んで、こっちははらはらしてくるのは、そういう工夫があるからこそなんだろうね。

〈みきお〉 そうそう。「私」^ウがかたずを飲んで母親の様子をうかがっているのがつたわってきたよな。

〈みなこ〉^エ 母親の心情がていねいにえがかれているから、読んでいる人が母親の気持ちになってしまうというのもあるだろうね。それでも、母親がカバーをつくった理由はよくわからなかったな。

〈ひろし〉 先生に対してのせめてものおわびの気持ちの表れだったかもしれないね。結局、「私」がヴェラーと友達でいられなくなったということははっきりしているけれど……。

〈みきお〉^オ 帳面を持って帰ったあと、この出来事から離れようとしていることが、「私」のつらさを感じさせるね。

〈みなこ〉^カ ほんとうにかなしいことだよな。「私」とヴェラーを仲たがいさせたかった先生の思い通りの結果になってしまったね。

〈ひろし〉 「私」はどうするべきだったんだろう。考えさせられてしまうな。

〔以下 余白〕

国語解答用紙

< R 06152064 >

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

[illegible]折
り
線

問二	問一
X	a
Y	b
	c
A	
B	d

問十	問九	問七	問五	問三	問二	問一
					A	a
		}	問六	問四	B	b
						c
		問八				d

< R 06152064 >

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

→ <https://www.youtube.com/watch?v=333333333333>

採点欄
国語

問十	問九	問八	問六・七

			二
			二
問五	問四	問二・三	問一

問十	問九	問七・八	問五・六	問三・四	問二	問一